
隷属法案
淫謀に堕ちた政治家



霧島 紗良 きりしま　さら

三十二歳／若手議員・嶺木理一の秘書

有能で隙のない、理一の右腕。
落ち着いた物腰と、熟れた果実のような艶。
どこか謎めいた微笑みを絶やさない。



玲奈 レイナ

匿名エステ《イグナシア》のセラピスト

顔も名前も明かさない密室で、
甘い声と指先で客を焦らす。
その名すら、本名かどうか分からない。

隷属法案

あいか

本作は成人向けのフィクションです。

登場人物はすべて成人であり、実在の人物・団体・国とは関係ありません。

18歳未満の方は閲覧できません。

無断転載・無断転送・再配布を禁じます。

目次

一章

一章

黎苑国（れいえんこく）

――かつて「黄色い猿」と蔑まれながらも、努力と忍耐を礎に、科学と技術の国へと変貌を遂げた新興強国である。

泥にまみれ、冷笑に耐えながらも誠実に積み重ねてきた成果は、いまや世界の信頼を勝ち得るに至り、国民はその勤勉さを誇りとしている。

資源も武力も持たぬこの国が、ただ一つ信じてきたもの

――それは「正道による勝利」だった。

その隣に広がるのが、艶羅連邦（えんられんぽう）。

外見こそ黎苑と似通っているが、その内実はまるで異質だった。

骨格からしてしなやかで、美しく艶めいた人々が暮らす土地。

国土も人口も平凡、資源に乏しいにもかかわらず、文化も経済も、どこか滑らかで異様なほどに潤っている。

だが、その裏にある仕組みは見えない。

――政変の影に、経済の歪みに、彼らの『指』が忍び込んでいると囁かれることもある。

曰く――艶羅の女は、目と肌と声で男の魂を蕩かす。

曰く――一度でも肌を交わせば、もう二度と抜け出せなくなる。

曰く――世界を操るのは、軍事でも資本でもなく、肉体そのものである、と。

それらは都市伝説。
酒席で噂好きの議員たちが笑いながら囁く、夜の与太話。
――少なくとも、黎苑の若き有能議員・嶺木理一にとっては。
「くだらないな」
静かにそう吐き捨てた彼は、信念と知性の人間だった。
だが――彼はまだ知らなかった。
その『くだらない話』が、やがて彼の身と心を支配する現実になることを。
「黎苑の未来を託せる三六歳の若手議員、嶺木理一氏――」
高級車のモニターから、女性アナウンサーの声が響く。
画面には、壇上で穏やかに、そして力強く語る理一の姿が映っていた。
襟元にさりげなく覗く青いタイ、凛とした立ち姿。
背丈こそやや小柄ではあるが、その瞳の奥に宿る確信と知性が、それを補って余りある存在感を放っていた。
「国一の研究機関で成果を上げた後、わずか数年で議員に。技術者と政治家、二つの顔を持つ新時代の旗手です」
夜景を背景に、番組は静かに締めくくられた。
後部座席でその映像を眺めていたのは、画面に映っていた本人――嶺木理一である。
彼は息をひとつ吐き、わずかに笑った。
「……少しばかり、持ち上げすぎじゃないか」
「ふふっ。ですが事実ですわよ、先生」
隣に座る女が、やわらかく微笑む。

霧島紗良――三十二歳。理一の秘書にして、どこか謎めいた存在だった。



歳相応の落ち着きと、熟れた果実のような艶をまといながらも、肌は透けるように白く、夜の街灯に照らされた横顔は陶器を思わせる。

その香りもまた、官能的だった。

香水と体温、そして女という生き物そのものの甘い匂いが、理一の鼻腔をくすぐる。

「国の科学技術を牽引する政治家で、しかもお顔まで整っていらっしゃる。世の女性が黙っていられるわけがありませんもの」

そう囁く紗良は、深い栗色の髪を後ろで束ね、涼やかな眼差しを横に向けた。

スカートの裾から覗く、黒のストッキングに包まれた脚。

ライトに照らされて際立つ太腿の起伏が艶めかしく、理一は咄嗟に視線を逸らす。

「……お世辞も、秘書の務めか？」

「いえ、本心です。尊敬と……少しの嫉妬を込めて」

その声は、まるで車内の空気そのものに溶けていくような、低く深い響きを持っていた。

「嫉妬？　何にだ？」

「――先生が、無自覚に人を惹きつけてしまうところに、です」

理一の胸の奥に、ふと重たいものが沈む。

表向きは華々しい。しかし、その裏で理想を貫く苦悩は尽きない。

黎苑――かつて『体の小さな黄色い猿』と侮られたこの国は、いまや頭脳で世界と渡り合っている。

骨格が細く、声が通らず、感情を表に出さないと言われた黎苑人。

だが彼らは、黙して耐え、神経と知性を鍛え上げることで、生き残ってきた。

その系譜の延長にある者として、理一は誓ったのだ。
先人の努力に報いるため、政治の世界に足を踏み入れることを。
――だが、待っていたのは修羅の道。
正義も論理も、時に利害と欲望に蹂躙される現実。
数えきれない妥協の果てに、それでも彼は信念を捨てなかった。
「……サラ君は、いつも俺を買いかぶりすぎる」
「過剰評価ではありませんわ。私は、先生の『力』を信じています」
紗良はそう言いながら、脚を組み替える。
ストッキング越しに擦れる音が、理一の耳朶を撫でた。
（……駄目だ）
あくまで、彼女は『部下』だ。
そう自らに言い聞かせながらも、喉奥に熱が宿るのを感じる。
理一は、そっと目を閉じた。
「今日は……もう遅いな。お疲れ様。運転手、サラ君の自宅近くまで頼む」
「あら……それでは、お言葉に甘えさせていただきますわ」
車が止まり、高層マンションの前に紗良が降りる。
その細身の脚がすらりと伸び、ヒールが路面をコツンと打った。
夜の街に溶けてゆく後ろ姿を見送りながら、理一は低く囁く。
「『いつもの場所』まで頼む」

静かに、車は動き出した。
向かう先は――誰にも言えぬ秘密。
匿名エステ《イグナシア》。
車が地下駐車場に滑り込むと、理一は無言でサイドミラーを確かめ、大ぶりの黒いマスクを口元にあてがった。
顔の下半分が隠れると、扉を開き、静かに外へと足を下ろす。
高層マンションの地下出入口から内部へ。
乗り込んだエレベーターのボタンには、誰にも知られていない『もうひとつの階』がある。
ドアが開いた瞬間、空気が変わる。
絨毯は柔らかく、足音を飲み込む。
空調に乗って漂ってくるのは、仄かに湿り気を含んだ、甘く危うい香り。
思考の芯に溶け込むような、精巧に調香されたアロマが、五感を静かにほどいていく。
――《匿名エステ・イグナシア》。
政財界の男たちが、『男』という本能へと還る場所。
ここでは、名を名乗る必要も、顔を晒す必要もない。
フロアまるごと一つが個室。誰にも邪魔されず、記録にも残らない『癒し』が許される。
理一がここを初めて訪れたのは、約1年前。
学生時代から親交のあった先輩議員が、無言で渡してきた金色のカードと「一度でいい、行ってみろ」という一言――。
正直、幻滅しかけた。

己を律して生きてきた人間が、こんな『俗』を勧めるのかと。
だが――足を踏み入れた瞬間、その価値観は音を立てて崩れた。
名も顔も、すべて剥がされるこの場所で、自分が人間であることを思い出す。
理屈ではない。『癒し』そのものが、ここにはあった。
回想を胸の奥へ押しやり、理一は無言で廊下を進む。
会員証をかざせば、音もなくドアが開いた。
迎えられたのは、静かな湯気の立ち上る、贅沢な湯殿。
イグナシアでは、施術前の入浴が『儀式』として組み込まれている。
体を清め、緊張を溶かし、すべてを預ける準備を整えるために。
理一は脱衣所でスーツを脱ぐ。
肩からスルリと滑り落ちる生地。
纏っていた『役職』が、そこで音もなく剥がれていく。
湯気と香りに包まれる中、バスローブを羽織り、湯船へと足を進めた。
深く彫り込まれた楕円の浴槽に、湯が満ちている。やや熱め。
沈んだ肩から首筋までが、じり……と火照り、思考の縁をぼやけさせていく。
（……今日も、来てしまった）
すでに何度目か分からない。
脳裏に浮かぶのは――『あの女』、玲奈（レイナ）。
顔は知らない。けれど、声、手、脚の重み、匂い――

皮膚と神経が、すべてを覚えている。
（知られたくない。誰にも……）
性感を責められ、弄ばれたいという自分の深淵を。
『あの女』だけが、まるで見透かすように寄り添ってくる。
――射精寸前、ギリギリのところで寸止めされた初めての夜。
「……いま、出しちゃいそうだったでしょ？」
その囁きが、未だに耳から離れない。
その一言のせいで、彼は幾度となく扉を叩いた。
そして……今夜もまた、来てしまった。
湯船の中で、既に熱を帯び始めた下腹部に手を添える。
だが、堕ちてはならない。
そう思いながらも、欲望は確実に膨らみつつあった。
ふと、湯船の縁にある小さなランプが点滅した。
『準備完了』の合図。
紙パンツを履き、バスローブを羽織り、理一は静かに別の扉へと向かう。
肌に染みついた熱は、湯上がりのそれとは違う種類のもので――冷める気配はなかった。
「……いらっしゃいませ、今日もお疲れさまでした、お客様♡」
カーテン越しの声は甘く、柔らかく、それでいて媚びたような響きを帯びている。
理一は何も言わず、うつ伏せにベッドへと身を沈めた。

施術台の下、顔を隠すマスクの奥で、息を整える。
「ふふっ……今日も、おしゃべりしてくれないんですね？　恥ずかしがり屋さんなお客様♡」
玲奈（レイナ）――その名すら本名かどうかも分からない女。
彼女はいつも、『お客様♡』とだけ呼ぶ。
語尾に滲むのは、甘えと媚び、そしてほんのりとした嘲り。
声そのものが、媚薬のように耳に絡みつく。
ここでは、顔も名前も明かす必要がない。
どんな肩書きも、どんな社会的地位も、いったん扉をくぐれば脱ぎ捨てられる。
ただ『本能』だけが支配する密室。
欲望も喘ぎも、誰にも咎められることなく発散できる――それが《イグナシア》だ。
だが理一は、その自由すらも選ばなかった。
声を出すことすら許さぬように、唇を固く閉ざす。
その声には、黎苑国という国家の未来が乗っている。
たったひとことが、いつ、どこで、誰に聞かれてしまうか分からない。
だからこそ、彼は『基本サービス』の範囲から一歩もはみ出さず、ただ黙して焦らされるだけ。
その沈黙こそが、彼の防衛であり、同時に――
彼の抑えきれぬ欲望を、玲奈に見透かされる隙でもあった。
オイルを垂らす音。
そして、静かに始まる指先の動き。

肩の端に触れた瞬間、理一は思わずわずかに呼吸を止めた。
指は細く、しなやかで、まるで少女が遊び半分に撫でているような悪戯っぽさを秘めている。
だがその所作の一つひとつには、計算された間と、音のない圧が潜んでいた。
「ふふ……お客様、肩、すごくこってますねぇ♡　力入れすぎなんじゃないですかぁ？」
くすくすと笑う声が、背後から耳元に届く。
理一は何も返さず、ただ息を吐く。
だが、その沈黙さえ、玲奈には愉しみの材料になる。
「でも……そうやって我慢しちゃうところ、かわいいですぅ♡　ふふふっ」
肩甲骨の内側をなぞる指が、左右に滑るたび、理一の背筋がかすかに波打つ。
オイルを吸った肌に沿って、指が円を描き、少しずつ下方へと――
背中の中心、そして脇腹、骨盤の端にまで降りていく。
「ねぇ……お客様のここ、ピクって動きましたよ？　ふふ♡」
理一の背中にかかる重み――玲奈の太腿がそっと乗る。
軽く腰を沈めるようにして、理一の腰を挟み込む。



それだけで、すでに火照った下腹部に、肉感的な体温が直接伝わってくる。
（……声は出さない……）
そう己に命じながらも、理一の喉奥が震えていた。
玲奈は、耳元で甘く囁く。
「わかってますよぉ、お客様♡　声を出したら……って、がんばってるの。
でも……バレバレですよぉ♡　身体が、正直すぎますもん♡」
その声と同時に、指先は腰骨から鼠径部の『境界線』へと滑り込む。
だが、触れない。ほんのわずかに、皮膚と空気を揺らすように、近づくだけ。
「ふふっ……もう、ここ、ずっと待ってるんでしょ？♡
お願いされたら、触れてあげようかなぁ……なんて♡」
紙パンツの上から、玲奈の指が軽くトン……トン……と節を打つように叩く。
そのリズムが、理一の理性を少しずつ崩していく。
「触れられたいですかぁ？♡　イキたいですかぁ？♡」
理一の唇が震えた。だが、声にはならない。
その沈黙に、玲奈はくすくすと笑いながら、こう囁く。
「言ってくれたら、気持ちよくしてあげますよぉ♡　ほら、ね……？」
紙パンツ越しに、玲奈の指が陰茎のかたちをそっとなぞる。
爪ではなく、柔らかな指の腹で、輪郭だけを追いかけるように。
その圧は、甘く、じれったく、残酷なほどに優しい。

「んふふ……すっごく、膨らんでますねぇ♡　かわいい……お客様って、ほんとにお利口さんなんですねぇ。がんばって耐えてるの♡」

そして――指は、一度ピタリと止まる。

息を潜めた理一の上で、玲奈の囁きがふたたび降る。

「……でも、まだ言わない。ふふっ……じゃあ、もっと焦らしちゃおうかなぁ♡」

指先が、陰茎の根元に近い鼠径部へと移動し、

『撫でる』というより、『掘り起こす』ような円運動で、神経を揺さぶる。

「ここ……ぷくってしてるの、感じますかぁ？♡　ここって、ほんとのスイッチなんですよぉ♡」

玲奈の爪が、紙パンツの端をそっとめくりかけて、しかし――止める。

見せず、触れず、でも、逃がさない。

「ねぇ、お客様♡　もう我慢、限界じゃないですかぁ？♡」

理一の体は、うつ伏せのまま、わずかに震えていた。

汗ばんだ背中に、玲奈の吐息がふっとかかる。

「ね、イきたいって言ってくれたら、気持ちよくしてあげるのに……♡　お願いされるまで……だーめ♡」

そして、ピタリと手を止め、玲奈はそっと耳元で笑った。

「ふふ……お客様って、ほんとに、かわいい♡」

――焦らしは、まだ、終わらない。

玲奈の指は、ふたたび静かに動き出す。

まるで何事もなかったかのように――だが、それが逆に理一の神経を逆撫でする。
「……ほら、お客様のここ……♡　こんなに熱くて、硬くなって……♡」
再度オイルで濡れそぼった紙パンツの上から、ふくらみの縁をなぞる指先。
皮膚を滑らせるたびに、まるで意識ごと『そこ』を弄られているような錯覚が走る。
「ふふっ……がんばってますねぇ、えらい、えらい♡」
「でもねぇ……お客様、これ、ちょっと触っただけで、もうピクンってしちゃって……
ほんとに、かわいすぎる♡」
玲奈は、理一の太腿に軽く跨るようにして、全身の重みを添える。
太腿と二の腕が密着し、体温が直接伝わる。
湯上がりの柔肌からは、かすかに石鹸と女の香りが立ちのぼってくる。
「ねぇ……お客様。
もう、ずっと、お願いしたいの我慢してるんですよねぇ？♡
ほんとは『イかせてください』って言いたいんでしょう？♡」
その声は、耳を舐めるように甘く、そして低く潜り込んでくる。
理一は必死に唇を噛み、呻き声を押し殺していた。
理性の最後の砦が、きしみを上げる――
「……ふふ♡　わかりますよぉ。お客様のこういうところ……全部、ちゃんとわかっちゃうんです♡」
玲奈の指が、ついに、
紙パンツの縁をそっとめくった。

陰茎のかたちが、空気に触れる。
その瞬間、ひやりとした刺激が皮膚を走る。
玲奈の白い指が、それを包み込むように添えられた――



「ねぇ……♡
このまま……ぐちゅぐちゅって、扱いてあげたら……
どんな顔しちゃうのかなぁ、お客様♡」
指先が、わずかに動いた。
だが、それはほんの一往復。
すぐに、ぴたりと止まる。
「……あっ、もしかして……」
「今、イきそうになっちゃった?♡」
耳元で、楽しげな吐息混じりの囁き。
同時に——玲奈の手が、ふっと離れた。
「……ふふ♡　残念でしたぁ♡」
紙パンツが、そっと戻される。
ぬくもりと刺激が、一瞬にして奪われた。
理一の身体が、びくりと跳ねる。
熱だけが、腹の奥にこもったまま。
だが、放つこともできず、ただ疼くだけ。
玲奈は、ゆったりとした動きで、施術者の口調へ戻っていく。
「今日はここまで。……ね、お客様♡
お願いされるまでは『健全なマッサージ』の基本サービス、ですからぁ♡」

その声の奥には、確かな支配と、悦びがあった。

彼女は、男を弄び、熱を積み上げ、そして――解放しない。

「また……来てくださいますよね？♡」

理一は、声も出さず、ただ深く息を吐いた。

今夜もまた、果てることなく――疼きを抱えたまま、その部屋を後にした。

《イグナシア》――

理一にとって、それは理性と支配の境界をぼかす、蜜の沼でしかなかった。

体験版はここまで

続きは製品版でお楽しみください

奥付

書名　隷属法案

版　初版

著者　あいか

発行　あいかの部屋

発行日 2026-10-23

挿絵　巻頭カラー2点・本文白黒15点